

凧部日記 01 号

300年の伝統に連なる (2015/06/09)

前年度末に部員ゼロになってしまっていた凧部だったが、5月の連休明け、「携帯」片手に放課後の時間を過ごしていた数名の女子生徒の手を借りて凧を作り始める。彼女たちは言うなれば「助っ人」で、ほとんどが正式な部員にはならなかったのだが、彼女たちが動いてくれたお陰で曲がりなりにも今年度の活動が始められたと言える。

しかし、大凧合戦が近づいてきても、部の存続すら怪しいという事情は変わらない。もうなりふり構っていられる状態ではなかった。「凧部に入らない？ ラーメン奢ってやるから。」胃袋をターゲットに勧誘を行い、2年生8名、1年生1名の部員を得た。でも、それは実のところどうだったのだろう。「ラーメン」の引力だったのか。それとも「白根」のDNAが疼いてのことだったのか。まあ、それはさておくとしても、右も左もわからない私たちが、長年、部の面倒を見てくださっている「凧名人」生野（はいの）さんと山際さんのご指導のもと、凧揚げの練習を行い、あれよあれよという間に伝統の大凧合戦に参加してしまったのだから、これはこれで凄い成り行きではないだろうか。

OBも加わり、揃いの法被に袖を通して上がった合戦の土手では、「何してんだ、高校！ 一列になって真っ直ぐ走れや！」などと怒鳴られたりもしたのだが、青地に赤で縁取りされた「高」の文字の凧が立ち上がり、合図のもと、一斉に駆け出す際の表情も徐々に凛々しくなってきたと言え、手前味噌に過ぎるだろうか。そして大空高く悠然と泳ぐ自分たちの六角凧を見上げ、対岸に向かって、「ホラ、来いやあ〜！」と笑顔で煽ってみたりするのは何とも言えない気持ちよさがあった。そんな男子2名、女子7名の新米部員たちによる初々しさ満載の合戦初参加だって、別の角度から見たら、白根界隈の300年の伝統に連なることになった訳だから、もうホントに大変なことなのである。戦果は引き分けが数回で、初勝利はお預けとなったのだが、一人ひとりの表情には疲れとともに清々しさが溢れていたように思う。また、全員が土手のゴミ拾いも厭わない立派な凧部員となっていたことも特筆に値しよう。私たちの2日間の凧合戦はこうして幕を閉じた。でも、件の「ラーメン」のことは忘れていないだろうから、みんなの都合の良い日に、丼を前に慰労してあげよう。そこで彼らからどんな話が飛び出すかも楽しみである。

下村 伸（凧部顧問）



